

## 『食べる経済学』 下川 哲 著

食料領域 研究員 伊藤 暢宏

「食べる」ことは、生きるために必要不可欠な行為です。しかし、私たちが豊かな食生活を楽しむために、実に多くの人や事業者の努力やその連鎖があります。本書では「はじめに」において、ある日の著者の食卓に並んだ具体的な食事を例にとり、それを支える人や事業者、果ては地球環境にまで思いをよせ、経済学から捉えることの重要性を提示しています。本書は「第一部：地球と食卓をつなぐ感覚」「第二部：飢える人と捨てる人」「第三部：未来に向けた挑戦」「第四部：未来をイメージする」という四部から成る構成であり、全12章がテーマごとに書かれています。

まず第一部で著者は、様々な食品を作るために必要な資源量を提示することから話を始めます。食や農は資源の利用と切っても切れませんが、私たちは、食卓で資源や環境を利用している実感はありません。ここで著者は「社会的に望ましい『食べる』とは何か？」を読者に問うています。普段深く考えずに行う「食べる」という行為は、環境などの社会問題に結びつくことも多く、そういったことを考えたことがない読者にこそ本書を読んでほしいとして内容に入っていきます。

第二部では、第一部で触れた「食べる」ことに関連する社会問題を説明しています。「食べる」ことには、私たちがコントロールできない「自然の摂理」のほか、市場機構の限界から来る栄養不足や食品ロス、食品偽装や過度な環境破壊のような市場の失敗、国際政治上の思惑といった、大局的ですがとても重要な点が関わっていることを順に説明しています。さらに、私たち個人が「食べる」ときに直面する「認知的なバイアス」についても指摘しています。これは、従来の経済学では単純化されすぎて抜け落ちていた重要な心理的要因で、栄養摂取や肥満など現代的な社会課題とも大いに関係してきます。

第三部・第四部では、「食べる」ことから考えた未来について議論しています。第三部では、第二部で説明した「自然の摂理」や「認知的なバイアス」を加

味した社会課題の解決方法を紹介しています。ここではゲノム編集技術や代替肉といったバイオ技術やDXのようなデジタル技術など、近年目覚ましい発展を遂げている技術をうまく使うことが挙げられています。ただし、これらを使うのも人間なので、認知的なバイアスを加味することが重要で、ナッジと呼ばれるより良い状況に導く、ちょっと

した後押しの工夫も合わせて紹介しています。最後に、食を切り口に未来の社会を考える際に、フューチャー・デザインと呼ばれる新たな取り組みによって未来の視点を取り入れることや課題の達成度を考慮したバランスの取れた対策の必要性を説きながら本書を締めくくっています。

以上のように、本書は、食や農に関する非常に広範な話題について、公表されている研究成果に基づいた内容を分かりやすい筆致で説明しています。特に、普段何の気なしに行っている「食べる」行為から、その先にある作ることや、環境や資源を保全していくことに思いをはせることは、忙しい日常からはなかなか難しいことかもしれません。しかし、SDGsが取り沙汰されるようになって久しい昨今、持続的な食や農に関わる諸課題を網羅的に扱っている本書は一読の価値があります。説明や考え方の道具として経済学が随所に埋め込んであり、これらの課題を考える際の道筋も提示してくれています。また、巻末の参考文献も充実しており、一般の方だけでなく、農業経済学など関連分野の学生にとっても、分野の入口として十二分に役割を果たしてくれることでしょう。



『食べる経済学』

著者／下川 哲

出版年／2021年

発行所／大和書房